

令和 7 (2025) 年 度
総合型選抜 (人間健康科学部 福祉学科) 試験問題

小論文

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないでください。
- 2 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 3 解答には鉛筆かシャープペンシルを使用してください。
- 4 問題は全部で7ページ、解答用紙は全部で3枚あります。
- 5 試験時間は90分です。
- 6 試験終了後、問題冊子も回収します。
- 7 何か伝えたいことがあるときは挙手してください。

第1問 次の文章を読んで、続く設問に答えなさい。

ある高校三年生が、子どもの貧困に関するイベントで、当事者として発言した。それをNHKが七時のニュースでとりあげた。五〇万円の学費が工面できずに好きなデザイン系の専門学校に進学できないこと、家が貧しくてクーラーのないことなどが映し出された。特に視聴者に強い印象を与えたのが「一〇〇〇円のキーボード」だった。中学生のとき、パソコンの授業についていけなくなったとき、母親が「パソコンは買ってあげられないが」と与えてくれたものだという。

ところがその後、彼女が好きな映画を六回見ていることや、七八〇〇円のコンサートチケットを買っていること、好きなマンガの関連グッズを買って「散財した!!!」と書いていることなどがツイッターの履歴などからわかり“炎上”した。

国会議員の片山さつき氏がNHKに説明を求め、NHKは「貧困の典型例として取り上げたのではなく、経済的理由で進学を諦めなくてはいけないということを女子高生本人が実名と顔を出して語ったことが伝えたかった」と釈明した。——こういうことがあった。

(中略)

高校生のツイッターを見て、怒りを覚えた人たちの気持ちはわかる。番組を見て「一〇〇〇円のキーボードしか買えないほど家計が苦しい」という印象を受けたのに実態が違う、だまされた、と感じたのだろう。その「裏切られた感」が“炎上”を招いた。

彼女は、番組から印象づけられたほどには貧しくない、過剰に貧しさを演出するのは行き過ぎではないか、と。それが「ねつ造」という批判になった。ねつ造されたのは「貧困」だ。彼女は「貧困」ではないのに「貧困」とねつ造されたのだ、と。

(中略)

それに対して「いや、それも貧困なんです」という反論が出ている。

いま日本で言っている「貧困」は、「相対的貧困」のことであり、それは彼女のような「趣味に使えるお金がないわけではないが、まとまった進学費用は用意できない」という低所得家庭を含む。

年間所得が単身者で約一二二万円、二人世帯で約一七三万円、三人世帯で約二一一万円、四人世帯では約二四四万円まで(二〇一二年時)は、日本政府の定義で「相対的貧困」であり、相対的貧困状態であっても上のほうは、衣食住に事欠くわけではない。それでも、定義上は「貧困」だ。

したがって、彼女が同じ映画を六回見ようと、七八〇〇円の観劇をしようと、一〇〇〇円以上のランチを食べようと、それはやりくりの話であって、相対的貧困状態であることと矛盾しない、と。だから、彼女は「(絶対的)貧困」ではないだろうが「(相対的)貧困」であり、「子どもの貧困」というタイトルの下に彼女をとりあげても問題ないし、彼女の消費実態は「進学できない」という番組の中心的要素に比べて枝葉の問題なので、とりあげなかったことも問題ない。だから「ねつ造」という批判は当たらない、と。

(中略)

この反論は理屈の上では正しい。私もそのように言ってきた。同時に、今回の“炎上”は、その理屈を十分に普及・浸透させられていない。より多くの人に「腹落ち」してもらっていないという私たちの力不足を示している、とも思う。

「貧困」といえば、当然に衣食住を欠くほどに貧しいことを指す、と考える人は依然として多い。周りの人ができることができない（みんなが修学旅行に行くのに、自分だけ行けない）といった相対的落ち込みは、日本ではむしろ「格差」の問題として語られてきた。衣食住に事欠くほどの「貧困」なら社会的になんとかすべきだが、「格差」ならある程度は許容できるし、許容すべきだというのが、大方の理解だ。

ではその「格差」と「相対的貧困」は、どういう関係にあるのか。

(中略)

格差はある程度までは「あって当然」のものである。たとえば「経済格差ゼロ」の世の中は考えにくしいし、もしあったら気持ち悪い。むしろ、ある程度の格差がなければ資本主義は成立しない。差異（違い）は多様性の源だからだ。

ところが「ある程度」を超えると、格差は社会に対してマイナスに作用し始める。活力の源泉ではなく、活力をそぐ方向に機能し始める。格差があることによるメリットをデメリットが上回る。

個人レベルでは、ある程度の格差は努力の源泉になる。「自分だって、やっている」と。しかし、過度になると「あきらめ」「絶望」が生まれ始める。「どうせ無理」「やってもムダ」と。その怖さはみんなが知っている。だから繰り返し言う。「夢や希望がもてるように」と。社会レベルでは、ある程度の格差はイノベーションの源泉になる。「より多くの教育投資」「他社よりよいサービス」「さらに便利な商品」……。しかし、ある程度を超えると「排除」が生まれ始める。進学できない、健康被害、社会的孤立、自殺、「誰でもよかった殺人」……。これは社会の活力をそぐ。

「ある程度の許容範囲の格差」と「過度の格差」の境界を示すメルクマール（目安）が「相対的貧困」だ。これを超える落ち込みを示す人たちが増えると、消費は停滞しますよ、活力はむしろそがれてしまいますよ、社会は不安定化しますよ、と。

だから OECD（経済協力開発機構）のような国際機関が、手間暇かけて相対的貧困に関する各国のデータを収集し、報告書をつくり、対策を促している。日本政府も、それがわかっているから、相対的貧困率を発表し、「一億総活躍」^{うた}を謳い、最低賃金をかつてないペースで引き上げている。

(中略)

もちろん「相対的貧困」は機械的な指標であり、あくまでメルクマールにすぎない。相対的貧困は「所得の中央値の二分の一未満」を指すが、「二分の一未満」に明快な根拠はない。「二分の一未満」という指標は、OECD が設定した共通指標にすぎない。現に EU は、独自に「中央値の六〇%未満」

をメルクマールにしている。日本が独自に「所得の中央値の四〇%未満を『過度の格差』と認定する」と設定することも可能だ。

また社会的な目安なので、個人単位では、あてはまらない人たちも大量に出てくる。極貧だったからこそがんばって成功した、という人がいるだろう。その人にとっては、過度の格差こそが自分の活力の源泉だった。中途半端な違いでは「むしろ燃えなかった」と振り返る成功者もいるだろう。

特に日本は「奇跡」と言われた高度経済成長を体験した国だ。敗戦で生まれた欧米との巨大な格差を埋めてきた経験を持つ。急速に生活が豊かになり、社会的地位の上昇のチャンスも多く、幼少期にとっても貧しかった経験を持つ人が、功成り名を遂げている事例は少なくない。しかも、その体験を自身の体験として持っている世代が、まだ健在だ。横並び意識が強いと言われる日本だが、大きな格差を肯定する人たちも少なくない。もちろん、わずかな違い（格差）で深く傷つく人たちも当然いるだろう。

(中略)

子どもについては、さらに「はずれ値」の増える可能性がある。

子ども自身には収入がなく、多くの場合、子どもの懐具合は親が決める。家庭的には裕福でも、親の教育方針によって子どもにわずかな小遣いしか渡さない家があるだろう。その家の子は、貧困家庭の子どもよりも自由にできるお金が少ないかもしれない。貧困家庭でも、自分のアルバイト代は全額自由に使えるという家もあるだろう。その子は、他の子よりも「羽振りがよい」かもしれない。

家にお金がなくても、子どもにはスマホやゲーム機を買い与えようとする家もあるだろう。反対に、家にお金があっても、買い与えないという家もあるだろう。買い与えることが、教育のためなのか、単に子どもにせがまれたからなのかによって、「意味」も違ってくる。子どもの消費実態が、家全体の所得の多寡をどこまで反映しているか、大きな傾向は示せても、個々に見れば「その通りではない」事例は数多く見出せるだろう。

(中略)

今回のNHK 貧困報道“炎上”は、登場した高校生と番組を制作したNHKが「まとまった進学費用を用意できない程度の低所得、相対的貧困状態にある」ことを提示したのに対して、受け取る視聴者の側は「一〇〇〇円のキーボードしか買えないなんて、衣食住にも事欠くような絶対的貧困状態なんだ」と受け止めた。そのため、あとで出てきた彼女の消費行動が、一方からは「相対的貧困状態でのやりくりの範囲内」だから「問題なし」とされ、他方からは「衣食住にも事欠くような状態ではない」から「問題あり」とされた。

いずれにも悪意はなく（高校生の容姿を云々するうんぬんのような誹謗中傷は論外）、この行き違いが求めているのは、衣食住に事欠くのでなければ、その格差は放置されるべきか、という点に関する冷静な議論だ。そしてその議論は、どうすればより多くの子どもたちが夢と希望を持てて、より日本の発展に資する状態に持っていけるか、という観点でなされるのが望ましい。その際には、高度経済成長を経

験した日本の特殊性や、格差に対する個人の感じ方の違いを十分に踏まえた、丁寧な議論が不可欠だ。

私は貧困問題を強調してきたが、その点が十分だったかといえば、反省がある。なので、今回の一件に関しては、登場した高校生に対しても、「裏切られた感」を抱いた視聴者にも、申し訳ないと感じる気持ちがある。その反省を踏まえ、今回の一件を建設的議論に発展させていきたい。

出典：湯浅誠（2017）『「なんとかする」子どもの貧困』角川新書

設問1 女子高校生のツイッターはなぜ“炎上”したのか。筆者の見解を踏まえながら200字以内で説明しなさい。

設問2 筆者は、「格差」と「相対的貧困」の関係をどのようにとらえているか。200字以内で説明しなさい。

設問3 2021年時点での日本の相対的貧困率は15.4%となっている（厚生労働省「国民生活基礎調査」による）。日本における相対的貧困率を減らしていくためにはどのようなことが必要だと思うか。あなたの考えを500字以内で説明しなさい。

第2問 以下の問いに答えなさい。

設問1 図表1は、地域コミュニティでのつながりに関する意識調査結果である。対象は24カ国の18歳以上の成人である。日本と他国を比較しながら、この図から言えることを3つ指摘し、それぞれ50字以内で述べなさい。

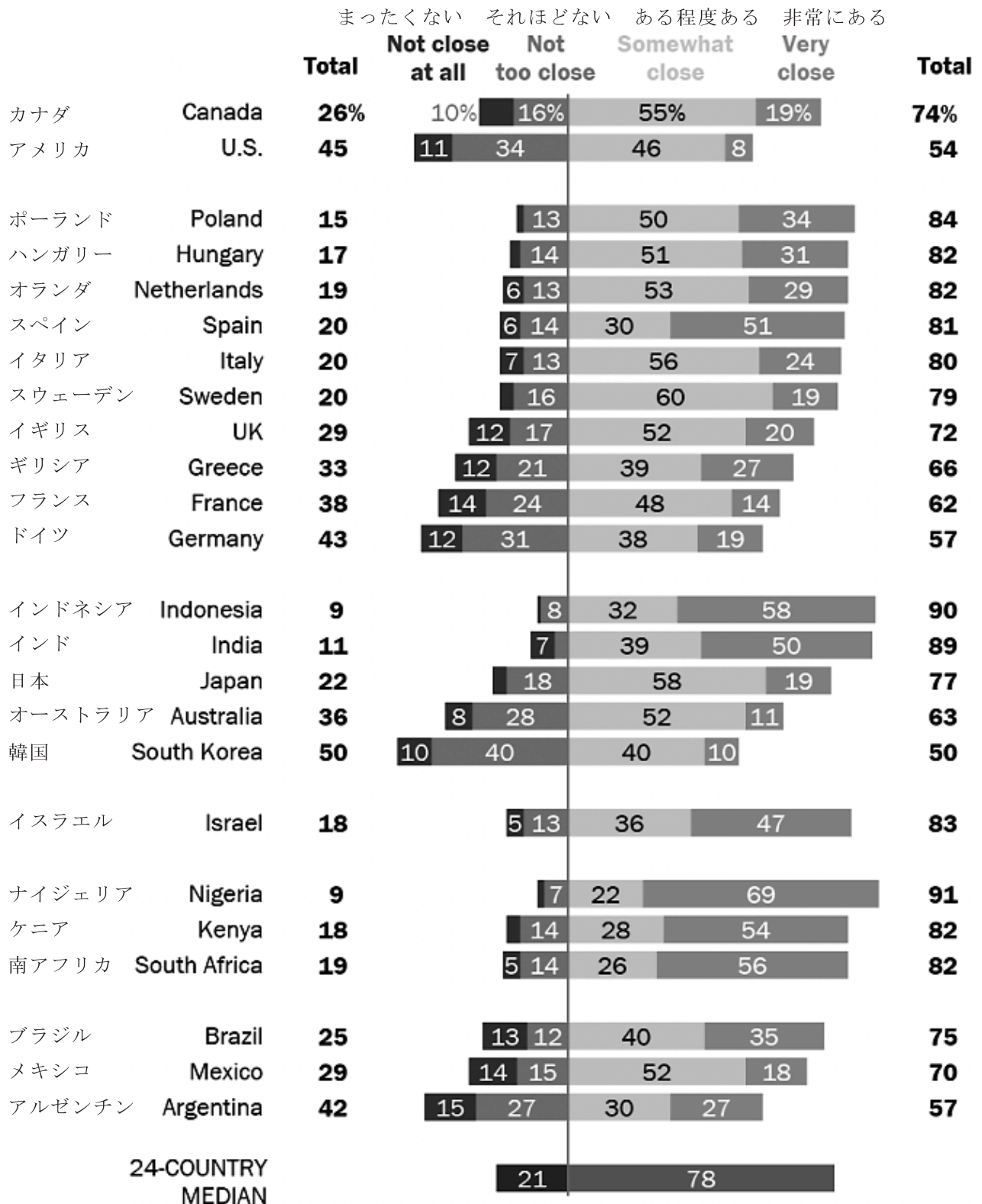
- (注) 1. 出所はPew Research Center, *Attitudes on an Interconnected World 2023*, December 6, 2023公表。
2. 日本での調査方法は、層化2段無作為抽出法（対象地域を無作為に抽出したうえで対象者を無作為に抽出する方法）。対象者は、固定電話と携帯電話の番号を無作為に設定するランダムディジットダイヤル法により抽出。質問と回答は日本語による電話調査。調査期間は2023年2月28日～4月16日。調査対象は18歳以上の成人。回答数は1,004人。
3. 図表1の左右の“Total”は、それぞれ「つながりがある」と「つながりはない」の小計である。「つながりがある」の小計から「つながりはない」の小計を引いた数値で比較することもできる。
4. “Median”は中央値・中位数のこと。

設問2 図表2は、現在の地域での付き合いの程度に関する意識調査結果である。対象は18歳以上の日本人の成人である。都市規模別・性別・年齢別などに着目し、この表から言えることを3つ指摘し、それぞれ50字以内で述べなさい。

- (注) 1. 出所は内閣府「社会意識に関する世論調査」2024年3月公表。
2. 調査方法は層化2段無作為抽出法。質問と回答は郵送法。調査期間は2023年11月16日～12月24日。調査対象は18歳以上の日本国籍を有する者3,000人。有効回答数は1,714人(57.1%)。
3. 図表1と同様、標本調査には±数%の標本誤差が必ず発生するため、数値は小数点以下を四捨五入して解釈したり表記したりしてよい。

設問3 わが国における地域福祉施策について、どのようなことに留意する必要があるだろうか。設問1、2で提示した図表1、図表2の調査結果から言えることを踏まえたうえで、あなたの考えを600字以内で述べなさい。

図表1 地域コミュニティでのつながりに関する意識



図表2 現在の地域での付き合いの程度に関する意識

	該 当 者 数	付 き 合 っ (小 て 計 い る	付 き 合 っ て い る		付 き 合 っ (小 計 な い	あ ま り 付 き 合 っ て い な い		無 回 答
			よ く 付 き 合 っ て い る	あ る 程 度 付 き 合 っ て い る		あ ま り 付 き 合 っ て い な い	全 く 付 き 合 っ て い な い	
総数	1,714	%	%	%	%	%	%	%
〔都市規模〕								
大都市	482	39.8	5.8	34.0	57.9	37.6	20.3	2.3
東京都区部	120	36.7	5.8	30.8	60.8	33.3	27.5	2.5
政令指定都市	362	40.9	5.8	35.1	56.9	39.0	18.0	2.2
中都市	693	53.7	6.8	46.9	43.1	33.2	10.0	3.2
小都市	393	64.6	13.5	51.1	33.1	26.7	6.4	2.3
町	146	61.0	13.0	47.9	36.3	29.5	6.8	2.7
〔性別〕								
男性	781	48.9	7.9	41.0	47.9	36.4	11.5	3.2
女性	933	56.3	9.1	47.2	41.5	29.5	12.0	2.3
〔年齢〕								
18～29歳	179	30.2	5.0	25.1	68.2	42.5	25.7	1.7
30～39歳	186	40.3	5.4	34.9	59.1	33.9	25.3	0.5
40～49歳	251	42.6	5.2	37.5	55.8	40.6	15.1	1.6
50～59歳	318	41.5	5.0	36.5	54.1	42.8	11.3	4.4
60～69歳	284	59.9	5.3	54.6	37.7	29.2	8.5	2.5
70歳以上	496	74.4	16.9	57.5	22.2	20.0	2.2	3.4